

IT業界の今後と産業創出に必要なもの

名城大学 教授 雑賀憲彦

ここ数年間、私のゼミ学生の就職先は90%がIT関係である。大学全体でもIT関係が最も多い就職先となっている。というのはIT業界は文系、理系を問わず採用し、入社後教育しながら仕事の能力も身につくという現場対応型の業界だからである。その意味では従来の文系、理系という2つの枠にはまらない新たなタイプの産業と言えるのではないだろうか。しかもそのIT産業が、昔の「産業のコメ」と言われた鉄鋼業のように、サービスの供給先がありとあらゆる分野に亘っているのである。今や日本では最も大きな産業分野になってきた。

今後ともIT産業の需要は高く、人手不足といわれ求人数は依然として多い。こうした状況を見るとIT業界はしばらく絶好調が続くように見えるが、世界のトップを行くアメリカのGAFとか中国のファーウェイ、アリババなどのITと比べるとまだまだ小規模のようである。

なぜなのだろうか。それはITが日本発ではなくアメリカの後追い産業だからである。以前世界を席卷した日本のエレクトロニクス、自動車、半導体などは今や影を潜めた状況にある。日本が世界のトップになるまではアメリカやEUがトップであった。やがて日本のITも世界のトップに躍進することになるかもしれないが、その後またITとは違った新たな産業をアメリカが生み出すと日本のITも衰退することになるかもしれない。

経済学では景気循環説があり、長期50年周期はコンドラチェフ、中期20年周期はクズネッツ、中期10年はジュグラー、短期3年周期はキチンの4者がそれぞれ発表している。この景気循環説のように、長期に見れば産業においても新たな産業がアメリカで勃興し、それを日本が後追いし、先行したアメリカを追い抜きトップになると、今度は違う分野でアメリカが新たな産業を興す、ということを繰り返しているような気がする。産業界での新説として「産業循環説」が存在するのではないだろうか。

新たに製品を開発する、新たな技術を生み出す、というイノベーションは先行者の利益が大きいという意味では非常に魅力的である。さらに、新たな産業を生み出すとなると、規模が大きいため一国の経済を復興させるほどの起爆剤になる。日本は前者の製品開発や新技術のレベルではイノベーションを生み出すことはできるのであるが、後者の産業を生み出し、一国の経済を立て直すほどのイノベーションは出来ていない。なぜアメリカにはできて日本にはできないのか。これは、極めて難しい問題であり誰も明快な回答を持って

いない。

私は一国の経済を復興するほどの規模でイノベーションを起こす産業までに成長させるには、世界を常に意識し、世界を相手にするというスケール、器の大きさが必要であると思っている。そのためには世界を相手に販売していくというマーケティング能力も必要だと考えている。日本人に足りないのはこのマーケティング能力ではないかと思っている。そもそもマーケティングという学問はアメリカで生まれており、日本には戦後輸入された学問であるため、馴染みが薄いし、修得している日本人も少ない。しかもマーケティングの中には競争戦略という概念もあって、日本人が苦手とする分野がある。したがって、日本人にはイノベーションはできるが、規模が小さく、一国の経済を揺るがすほどの産業には成長できないのだ。

そこで私は提案したい。日本人が苦手であろうがなかろうが、世界に伍して戦っていくには少なくともマーケティングは大学の全学部で必修科目にしておかなければならないのではないだろうか。

(1440字)

以上